

かご とり

## 籠の鳥

ピーー！ ピーー！

薄地のカーテン越しに差し込む柔らかな日差しと共に、屋外を自由に飛び回る小鳥達の爽やかな朝の挨拶が聞こえて来ると、僕も居た堪れなくなってしまう。

朝日が何もかもを優しく暖かく照らし出し、全ての生き物が俄かに活気付いて、口々に生きている喜びを思い思いの形で表現するこの時が、僕はとても好きだ。

朝が来ると、何だか心の奥底からワクワク感が込み上げて来て、更には皆が外で口々に呼びかける『おはよう！』の声に誘われて、きっと屋外の彼らには届かないのに『おはよう！』と僕も返してしまう。

僕は朝が大好きで、朝が来るのが嬉しくてしょうがないのに、生まれてからまだ一度も朝日が昇る所を見た事がない。

何故なら、僕のご主人様が朝寝坊だからだ。

ご主人様はとてもいい人だと思う。

毎日食べ物も水も新しいものをくれるし、籠の掃除だってしてくれる。

天気の良い日の昼間には、籠ごとではあるけれど外にも出してくれるんだ。

昼間に外へ出ると、心地良い風がよく吹いているし、最近は友達だって会いに来てくれるようになった。

僕は全身を鮮やかなライムグリーンの羽毛に覆われた、どちらかと言えば目立つ格好をしているけれど、友達は白と黒と茶色の入り混じった地味な羽毛を身に纏っていて、お世辞にもオシャレだとは言えない。

でも、その代わりに、友達には自由に大空を羽ばたく為の、力強い翼があった。

そして、僕のように籠に囲われている訳ではなかった。

だから、いつでも好きな時に、気の向くままにどこへでも飛んで行ける。

「やあ。いつもそんな狭苦しい籠の中で、一体何が楽しいんだい？」

外へ出て、心地良い風に当たりながら気分よく鳴いていると、大抵そう言ってどこからか友達が飛んで来るのだ。

そんな時、僕は決まってこう切り返す。

「風が吹いていて気持ちがいいんだ」

友達は生まれてこの方、籠に囲われた事なんて一度もなかったから、僕の姿を見るととても窮屈そうに感じ、不憫に思うのだそうだ。

でも、僕は生まれた時からずっと籠の中で育ってきたから、むしろここが居心地のよい家なのだ。

それに、ここにいる限りは食べ物にも水にも困らない。

そりゃ、この籠から自由に抜け出して、思い切り飛び回って空腹になった時だけ戻ってこれれば、今よりもっと良いのかも知れないけど、世の中がそう都合よく出来てはいない以上、今ある環境で満足するしかない。

考え方を少し変えれば、ここだってかなり居心地のよい場所なのだ。

友達はまだ一度もここで暮らした経験がないから、それが分からないのだ。

「幾ら至れり尽くせりの条件でも、籠の鳥は嫌だな。だって、鳥はいつでも自由に大空を飛び回れる様に、立派な翼が付いているんだよ」

ああ。

そう言われてみれば、確かに友達の言う通りかもしれない。

一生小さな籠の中で暮らすのに、こんなに大きな翼は必要ないかもしれない。

「まさか、君は外に出るのが怖いのかい？」

友達の何気ない一言に、とても馬鹿にされた様な、嘲られた様な気がしたから、反射的に、

「そんな事ない！」

と、激しい口調で強い憤りの気持ちを込めて否定してしまった。

友達は、余りに激しい僕の剣幕に一瞬驚いて、鳩が豆鉄砲を食らった様に目玉を丸くしていたが、直ぐに我に返ると、

「ははは。そうかい」

とだけ言い残して、そのままどこかへ飛び立って行ってしまった。

今度は僕が『しまった！』と舌打ちをする番だ。

あんな形で友達を追い返してしまっただから、『もしかしたら、余りにも怒ったものだから、僕に嫌気が差して、もう二度と遊びに来てくれないのじゃないかしら？』と、少々心配になって来てしまった。

もっと素直に『外が怖い』と言ってしまえば、こんな後味の悪い別れ方にはならなかったのだろうけど、反面それを認めるのが悔しかったから、つい心にもない憎まれ口を叩いたのだろう。

確かに外は怖いけど、それと同時に、外の世界にはとても興味があるのも事実だ。

だから、友達には外の世界で体験した楽しい事、嬉しい事、悲しい事や怖かった事までもを含めて、色々な話をしたいんだ。

そうすれば、少しは外の世界の事情が分かる様な気がするし、いつかは外に出る勇気が湧いて来るかもしれない。

もし、このまま一生をご主人様の元で籠の鳥として終わったとしても、何となく外の世界に触れた様な気分になれるね。

なのに、友達はあのような形で飛び立って行ってしまった。

あした 明日になったら、きぶん なお 気分を直してもう一度ここまで飛んで来てくれるだろうか？

\*

かご そうじ お 籠の掃除が終わって、食べ物も水も真新しい物に取り替えてくれたので、『まずは味見』  
などと考えていると、又してもご主人様が籠の中に手を伸ばしてくる。

べつ つか へつ つか 別に捕まえて食べてやろう…と言う訳ではなさそうだが、あの大きな手が近寄ってくる  
だけで、何だかとても怖くなって逃げてしまうのだ。

しかも、この所ご主人様は、人差し指だけを伸ばして僕の足先に近づけて来る。

同じ事を最初にやられた時には、とても怖くなって思わず籠の中を逃げ回ってしまった  
が、毎日同じ事を繰り返しているうちに、『危険ではない』という事だけは理解できた。

しかし、そうと分かるとご主人様の指先は意外と掴み心地が良く、太さも僕の足にちよ  
うど合う程度なので、足元に差し出されるとつい飛び移ってしまう。

すると、ご主人様はこの時を待ってましたとばかりに、僕を籠の外へ連れ出そうとする  
のだ。

「いやだよ！ 外は嫌だ！」

僕は慌てて叫びながら飛び立つと、ご主人様は少々がっかりした表情を浮かべて、  
一旦籠から手を抜き取る。

でも、しばらくして僕が少し落ち着いたと見るや、性懲りもなく二度、三度と同じ事を  
繰り返すのだ。

その度に僕は『外へ出るのは嫌だ！』と、暴れて必死に訴えかけるが、言葉の通じな  
いご主人様に伝わる筈がない。

それに、友達達は僕が『外へ出るのが怖い』事を不憫にも思い、また馬鹿にもしていた。

このままではいけないだ…と言う事だけは、僕にも分かる。

それならばいっそ、僕もこの際『外が怖い症候群』を克服しよう。

既に今日何度目か分からないけど、足元に差し出されたご主人様の指先に飛び移り、そ  
のまま爪を立ててきつくしがみ付いた。

するとご主人様は、今度はゆっくりと慎重に指を動かして、遂に僕の体が籠の入り口  
を潜り抜けた。

——僕は今外の世界にいるんだ。

そう思っただけで、どうしてよいのか分からなくなって、頭の中が真っ白になってし  
まった。

それから数時間も経った様な、しかしほんの一～二分しか経っていない様な時間が流れ  
た時、僕は何かの棒に掴まっていた。

——ここはどこだろう？

はじめて見る風景に、瞬く間に心の不安が頂点に達して、僕は無意識のうちに鳴き叫んでいた。

「怖いよ！ 助けて！」

そうやって何度叫んだ事だろう。

すると、どこからか聞き慣れた声が聞こえてきて、最近やっと慣れて来たご主人様の指先が僕の足先に突き出された。

ご主人様は何かを言いつつ、僕を再び籠の中へ戻してくれたけど、しばらくは心臓の鼓動もドクドク鳴って、体中のガクガクという震えが止まらなかった。

僕にはやっぱり、籠の鳥が性に合っているのだろう。

(了)

HP 【Blankfolder】

<http://blankfolder.huuryuu.com/>

<http://blankfolder.blog.shinobi.jp/>

Copyright(C) 2006-2007 【Blankfolder】こりん, All Rights Reserved.

本ファイルの二次配布はご遠慮下さい。

本作品へのお問い合わせは上記 HP にて受け付けております。

本作品に対するご意見、ご感想は上記 Blog でもお受けしております。